

『日本法史から何がみえるか ——法と秩序の歴史を学ぶ』

(K.U.・20代・司法修習生)

私は、これまで法制史を扱ったことはなかったのですが、通史を扱った書籍が刊行されたということで、法を歴史的に見直してみようと、本書に関心を持ちました。

本書の特徴としては、まず、日本の律令の前提になった中国の《礼》思想から、近年の司法制度改革に至るまで、日本法史の通史を扱っていることが挙げられます。個々の時代の記述が減少せざるを得ないとしても、近代法とそれ以前が完全に断絶しているわけではないことを示す試みとして、よかったですと思います。また、冒頭と末尾の補章のほか、各所で、執筆者により、法史研究に向かう心構えが垣間見え、研究に興味のある人が読んでみても有益だと思います。

改善点を挙げるとすれば、紙面の都合があるのですが、古代・中世と近現代についても、史料の画像をより多く挙げられれば、読者がイメージを掴むのに加え、研究への誘いとしてもよかったですのではないのでしょうか。

本書は入門書なので、法史により立ち入るなら、巻末のブックガイドや国立国会図書館のウェブページを参照して、史料や文献に当たる必要があります。しかし、「日本法史を振り返りつつ、あれこれ考える」愉しみを気づかせてくれるという意味で、よい一冊だと思います。

『法学教室』2018年7月号(No.454)掲載「Reader's Voice」より